

インテリジェンスと知識人

加藤哲郎

早稲田大学大学院政治学研究科客員教授

一橋大学名誉教授

略歴 岩手県盛岡市出身。

1970年 - 東京大学法学部第3類卒業。株式会社大月書店に入社。
1978年 - 名古屋大学法学部助手に就任。
1980年 - 一橋大学社会学部専任講師に就任。
1981年 - 一橋大学社会学部助教授に就任。
1989年 - 一橋大学社会学部教授に就任。
1993年 - 論文「コンメンタルの世界像 ―世界政党の政治学的研究―」で名古屋大学博士(法学)号を取得。
1996年 - デリー大学中国日本研究所客員教授に就任。
1999年 - メキシコ大学院大学客員教授に就任。
2000年 - 一橋大学大学院社会学研究科教授に就任。
2010年 - 早稲田大学大学院政治学研究科客員教授に就任。一橋大学を定年退職し、名誉教授に就任。

著作 『国家論のルネサンス』(青木書店、1986年)

『ジャパメリカの時代に―現代日本の社会と国家』(花伝社、1988年) 『社会主義と組織原理』(窓社、1989年)
『戦後意識の変貌』(岩波書店、1989年) 『東欧革命と社会主義』(花伝社、1990年)
『社会主義の危機と民主主義の再生―現代日本で市民であること』(教育史料出版会、1990年)
『コンメンタルの世界像―世界政党の政治学的研究』(青木書店、1991年)
『ソ連崩壊と社会主義―新しい世紀へ』(花伝社、1992年) 『社会と国家』(岩波書店、1992年)
『国民国家のエルゴロジー―『共産党宣言』から『民衆の地球宣言』へ』(平凡社、1994年平凡社ライブラリー版、2002年)
『モスクワで肅清された日本人―30年代共産党と国崎定洞・山本懸蔵の悲劇』(青木書店、1994年)
『現代日本のリズムとストレス―エルゴロジーの政治学序説』(花伝社、1996年)
『20世紀を超えて―再審される社会主義』(花伝社、2001年)
『象徴天皇制の起源―アメリカの心理戦「日本計画」』(平凡社[平凡社新書]、2005年)
『情報戦の時代―インターネットと劇場政治』(花伝社、2007年)
『情報戦と現代史―日本国憲法へのもうひとつの道』(花伝社、2007年)
『ワイマール期ベルリンの日本人―洋行知識人の反帝ネットワーク』(岩波書店、2008年)
『日本の社会主義―原爆反対・原発推進の論理』(岩波現代全書、2013年)
『ゾルゲ事件―覆された神話』(平凡社新書、2014年)

共著 (伊藤正直・高橋祐吉・田端博邦・寺西俊一)『これからの日本を読む―現代社会入門』(労働旬報社、1987年)
(井上純一・鈴木浩・橋本和孝・三井逸友)『東京―世界都市化の構図』(青木書店、1990年)
(川上武)『人間国崎定洞』(勁草書房、1995年)

共編著 (ロブ・スティーン)『国際論争・日本型経営はポスト・フォーディズムか?』(窓社、1993年)

(田口富久治・小野耕二・中谷義和)『講座現代の政治学(全3巻)』(青木書店、1994年)
(石上英一・工藤善通・五味文彦他)『岩波日本史辞典』(岩波書店、1999年)
(渡辺雅男)『20世紀の夢と現実―戦争・文明・福祉』(彩流社、2002年)
(島崎爽助)『島崎蒔助自伝―父・藤村への抵抗と回帰』(平凡社、2002年)
(國廣敏文)『グローバル化時代の政治学』(法律文化社、2008年)
(田中ひかる・堀江孝司・小野一)『国民国家の境界(政治を問い直す)』(日本経済評論社、2010年)
(神山伸弘・今井晋哉)『差異のデモクラシー(政治を問い直す)』(日本経済評論社、2010年)
(丹野清人)『民主主義・平和・地球政治』(日本経済評論社、2010年)
(井川充雄)『原子力と冷戦―日本とアジアの原発導入』(花伝社、2013年)

1 はじめに——そもそもインテリジェンスとは？

- **日本語版 wiki** 「インテリジェンス (英語: intelligence) は、知能・知性や重要な事項に属する情報のこと。諜報活動のことを表すこともある。」
- **英語版 wiki** Intelligence has been defined in many different ways including as one's capacity for logic, understanding, self-awareness, learning, emotional knowledge, planning, creativity and problem solving. It can be more generally described as the ability to perceive information, and to retain it as knowledge to be applied towards adaptive behaviors within an environment or context.
Intelligence is most widely studied in humans, but has also been observed in non-human animals and in plants. Artificial intelligence is intelligence in machines. It is commonly implemented in computer systems using program software.
- **独語版 Wiki** Intelligence (englisch: Intelligenz) ist:
Bezeichnung für Themen aus dem Bereich Nachrichtendienst, siehe z. B.:
Communication Intelligence, Gewinnung von Informationen aus Fernmeldequellen
Electronic Intelligence, Gewinnung von Informationen aus elektronischen Quellen
Human Intelligence, Gewinnung von Informationen aus menschlichen Quellen
Imagery Intelligence, Gewinnung von Informationen aus Bild- oder Videoquellen
Open Source Intelligence, Gewinnung von Informationen aus frei verfügbaren, offenen Quellen
Signals Intelligence, Gewinnung von Informationen aus Fernmelde- oder elektronischen Quellen
- ★ **オープン・ソース・インテリジェンス** (英: open-source intelligence) とは、諜報活動の分野のひとつで、他の HUMINT (ヒューミント) や SIGINT (シギント) と呼ばれる分野が主として「秘密の情報をなんとかして得る」ことを旨とするのに対し、公然に公開される情報を情報源とすることが特徴である。OSINT (オシント) と略す。インテリジェンスの9割以上はオシントである。
- ★ (参考) 社団法人国際交流サービス協会 (IHCSA) 「外務省在外公館専門調査員とは、労働者派遣法の下で、わが国の在外公館 (大使館、総領事館、政府代表部、領事事務所) に2年の任期をもって派遣され、在外公館の一員としてわが国の外交活動に資するため、語学力及び専門性を生かしつつ、在外公館長の指揮監督の下に、派遣国・地域の政治、経済、文化等に関する調査・研究及び館務補助の業務を行なうものです。」 (修士以上、二年)

2 シャーマン・ケント:戦時 Writing History から冷戦期 Making History へ

- (Wiki) **Sherman Kent** (December 6, 1903 – March 11, 1986), was a Yale University history professor who, during World War II and through 17 years of Cold War-era service in the Central Intelligence Agency, pioneered many of the methods of intelligence analysis. He is often described as "*the father of intelligence analysis*".
Sherman Kent first served within the Research and Analysis Branch of the OSS as Chief of the Europe-Africa Division. In this capacity, he oversaw much of the process which would now be considered intelligence preparation of the battlespace in support of planning for Operation Torch, the 1942 Allied invasion of North Africa. After a post-war stint at the National War College, he returned to Yale for three years, during which time he penned his classic work, *Strategic Intelligence*. In November 1950, during the crisis that followed, the Chinese Communist incursion in the Korean War, which prompted a build-up and reorganization of the American Intelligence Community, he was called to Washington, DC, to assist Harvard historian William L. Langer, with whom he had worked in OSS, to form a new CIA Office of National Estimates (ONE). He succeeded Langer as chief of ONE in 1952, serving in that position for the next fifteen years under four Directors of Central Intelligence in four presidential administrations. ONE prepared more than 1500 speculative National Intelligence Estimates (国家情報評価書) for the President and top foreign policy-makers.
- (CIA Homepage) Sherman Kent was perhaps the foremost practitioner of the craft of analysis in American intelligence history. One of the architects of the US Intelligence Community, for nearly two decades he was at the head of its estimative machinery. He wrote one of the first books to systematically address the topic of intelligence analysis, a work that is still assigned reading in college courses and still stands as perhaps the most lucid of its kind. Throughout his career he strove to imbue the intelligence discipline with a sense of professionalism, and as part of that effort he helped to found the CIA's professional journal and inspired the formation of its Center for the Study of Intelligence (CSI). …

○イエール大歴史学教授(朝河貫一同様→OSS/Research & Analysis=RA、欧州局調査分析部長)Writing History1941 (F.S.Crofts & Co.,New York) からCIAの教科書Strategic Intelligence for American World Policy(Princeton UP 1949)へ

○Writing History(宮崎信彦訳『歴史研究の方法』建設社1949、『歴史研究入門』北房社1970)

第1章何故歴史を＝「社会が有益な記憶を正式に貯えていくこと」「厳密な批判的態度と自己批判」

第2章完全な題目の発見＝読書・趣味関心の断片、限定性、言語叙述、研究しやすさ(図書館等)

第3章研究の原理＝方法論的多元主義、仮説と検証の繰り返し(客観性・存在被拘束性)は前提?)

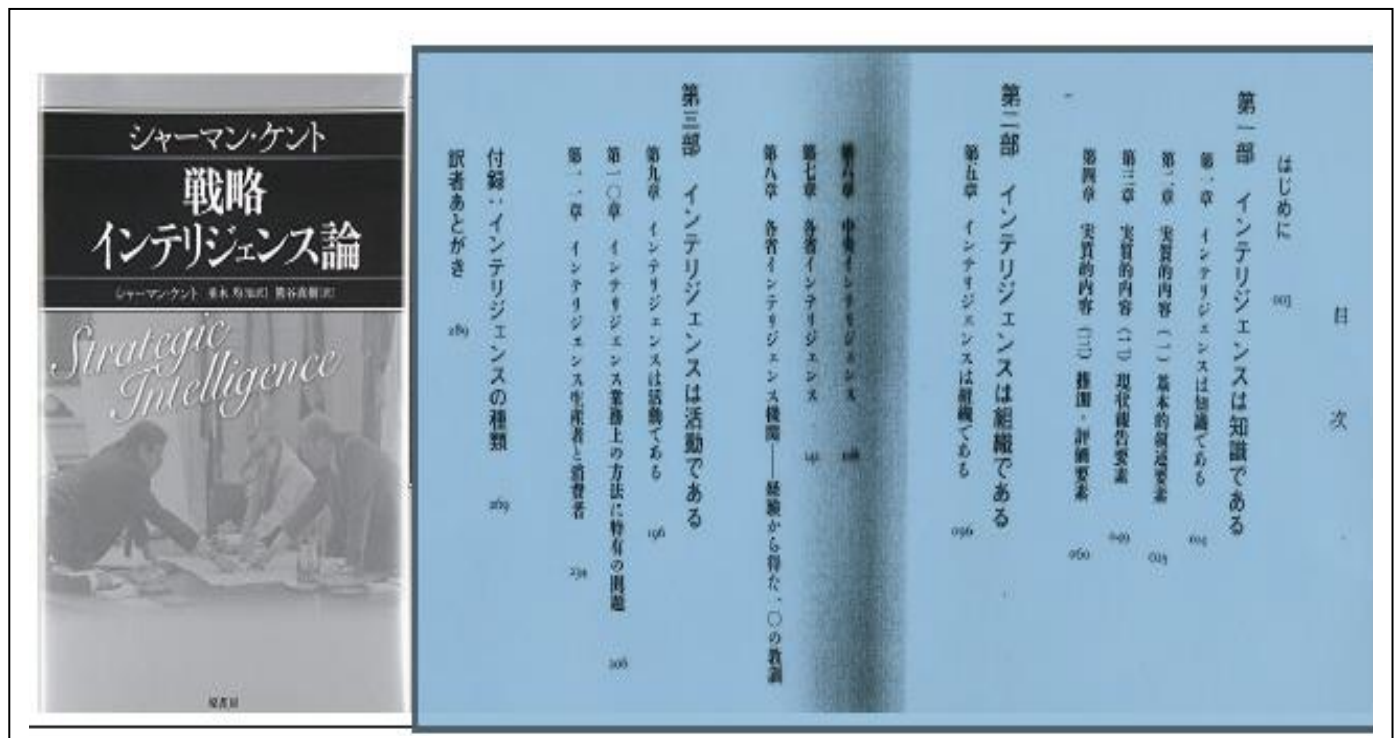
第4章資料の作成＝ノートとカードの整序、論理性「明瞭に表現された観念が絶えず流れてゆくもの」

第5章記述＝思想の連続性と明瞭性、主題の明示、章節見出し、受動態不可、接続詞・副詞

第6章文体と用法＝表紙・タイトル、脚注・参考文献表記、未公開資料と公開資料、大文字・小文字etc.

参考文献の解題

○ Sherman Kent 『戦略インテリジェンス論』並木均監訳、熊谷直樹訳、原書房、2015 Strategic Intelligence for American World Policy =米国の世界政策のための戦略情報/シャーマン・ケント著；法務府特別審査局訳（NDL無、東大駒場のみ所蔵）（特審資料、昭和27年6月15日号）法務府特別審査局,952.6(→7月公安調査庁発足)



—第一部は、ほとんど内容的にWriting Historyと同じIntellectual Research のあり方、学位論文の書き方

—インテリジェンス業界で言う「高次対外積極インテリジェンス」の「監視」と「調査」活動、

国際政治学(S.Krasner)で言うmaker,shaker,taker のうちmaker(中心国)の世界戦略立案

—客観的実体としての外国調査 (a 地勢・環境、都市・産業・輸送施設、b 国民、人口・居住・就労、c 芸術・科学技術、軍、d 政治体制、経済・社会集団、倫理規範etc「百科全書作り」)

—戦時戦略爆撃・政治経済戦争・軍政 (23の指定カテゴリー)、現地インテリジェンスマニュアル

—推測・評価要素、戦略的能力stature、特定脆弱点、蓋然的行動方針

—インテリジェンス組織＝①大規模な大学の学部＋②主要な大手新聞社＋③やり手のビジネス組織

(生産者/市場/消費者＝政府機関モデル)、中央インテリジェンスと各省・現地、図書館・DBが必須

—活動・過程としてのインテリジェンス①問題の発見、②方法論、③データ収集、④データの批判的評価、⑤評価済みデータからの仮説、⑥仮説の確認・否定、⑦真理に最も近い仮説の提示

—インテリジェンス特有的方法的問題＝消費者である政府・政策決定者との関係、代替選択肢

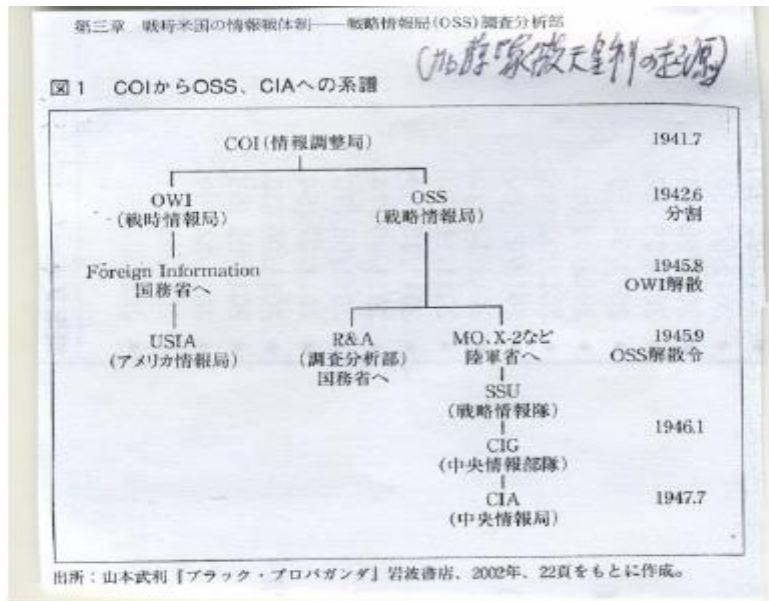
「インテリジェンス機関は、研究と緻密な思考を生きがいとする人々を採用しなければならない」

「探求に対する一種の学問的自由を保障すべきで、自由を制限しようとする勢力を排除すべき」

「消費者の先入観と合致しない知識を伝達しても仕方がないとインテリジェンスが観念した時点で、インテリジェンスは終焉を迎える」＝インテリジェンス自体の権力との距離・緊張関係を前提

● インテリジェンスとインテレクチュアル

- ① 知識と情報・データの生産＝研究対象・研究方法は基本的に同じ
- ② 研究目的の違いは消費者＝政府か、学界・学生か(新聞読者か)の違い、いずれも最終的には国民・市民、評価基準は歴史的眞理性・正当性＝インテリジェンスのインテレクチュアルな研究へ
- ③ ジャーナリズム研究や政策提言型研究、軍事研究では重複部分が大きくなり、相互依存増大、どちらかといえば新聞は「監視」的、知識人は「調査」風、しかし互換的(外務省在外公館専門調査員はおおむね研究者、日本の社会・人文科学の半世紀遅れの実学志向、競争的資金、評価制)
- ④ 部分的・専門的研究、地域・領域研究の重なり、情報公開・評価と機密保持・情報源の違い
- ⑤ ソ連「保全インテリジェンス」優位型＝手工業職人的、党の眞理独占に学問従属、秘教的体系
- ⑥ 米国「積極インテリジェンス」優位型＝大工業的共働マニュアル、学問的準拠枠組・方法的多元主義、学際的指標・統計、匿名レフェリー評価、期限付プロジェクトへの重点的予算配分



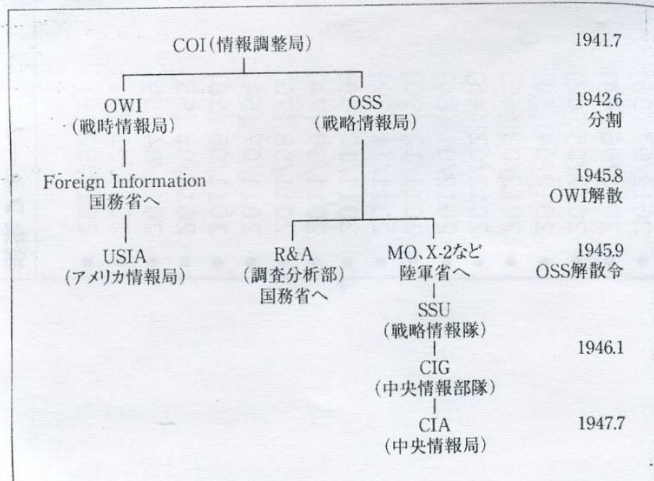
● ケントにおける国家安全保障の対外百科全書(右)と、軍政マニュアル(左) 調査項目

事に関する陸海軍便覧(General Military Manual of Military Government and Civil Affairs)は、合衆国軍によつて占領された地域の軍政執行および民事統制への……「一般指針として資する行動基準を明示する」ものであり、占領軍の責務として「二三の指定カテゴリーと一つの難問を挙げて」いる。すなわち、「政治・行政関連事項、法と秩序の維持、軍事・民事法廷の監督、民間防衛、民需供給、公衆保健衛生、検閲、通信、輸送、港湾業務、公共事業、通貨と金融、財政、物資統制、物価および配給、農業、工業および製造業、商業および貿易、労働、財産の運営管理、情報資料、難民職員および敵性国民の処分あるいは配置転換、教育、記録(そしてこれ以外の)難問」である。

I 背景一般。位置。国境。面積。歴史。政治・行政機構。
II 国土の特徴。地形。土壌。地表植被。気候。水利。
III 国民。民族。言語。行動傾向。人口分布。居住状況。保健衛生。社会構造。
IV 経済。農業。工業。通商。航路。漁業。
V 輸送。鉄道。道路。港湾。空港。内陸水路。
VI 軍事地理(地域別に細分)。
VII 現存軍事機構。陸軍・戦力組成。固定防衛施設。軍事施設。補給。海軍・戦力組成。艦隊。海軍沿岸施設。海軍航空部隊。補給。空軍・戦力組成。軍用機。航空施設(特別付録の飛行場リストなど参照。気球などの軽航空機、補給。
VIII 特別付録。政府要人の履歴データ。局地的地理用語。河川。湖泊。運河の類。発電施設のリストと仕様。道路の類。飛行場および最重要離着陸場のリスト、主な電話電信線網のリスト。通貨および度量衡。海岸(上陸作戦適地)。

● 保全インテリジェンス＝警察機能の背後にあるインテリジェンス。保安・治安・国境防衛

図1 COIからOSS、CIAへの系譜



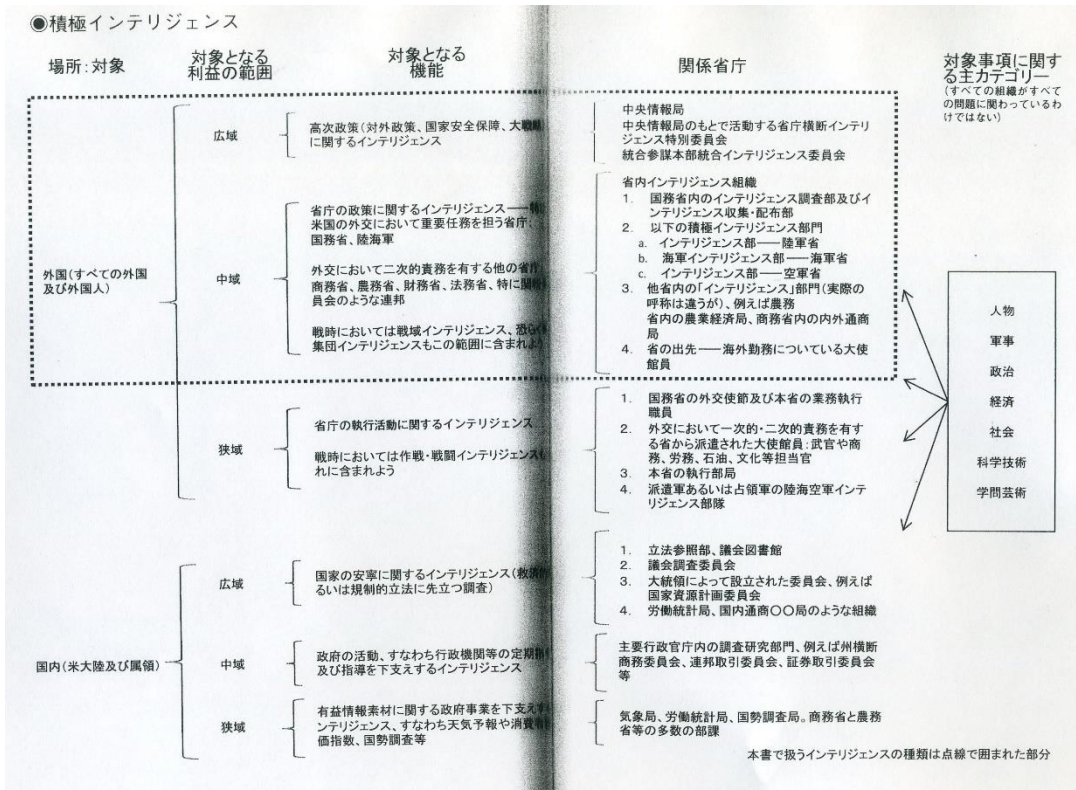
出所：山本武利『ブラック・プロパガンダ』岩波書店、2002年、22頁をもとに作成。

● ケントにおける国家安全保障の対外百科全書(右)と、軍政マニュアル(左)調査項目

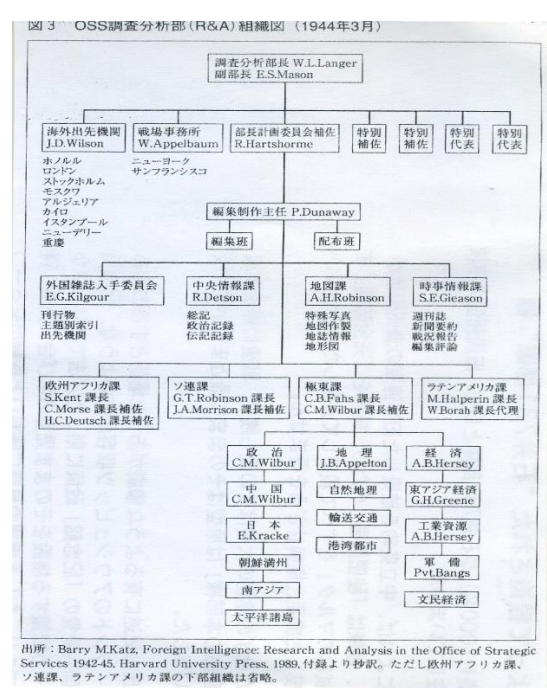
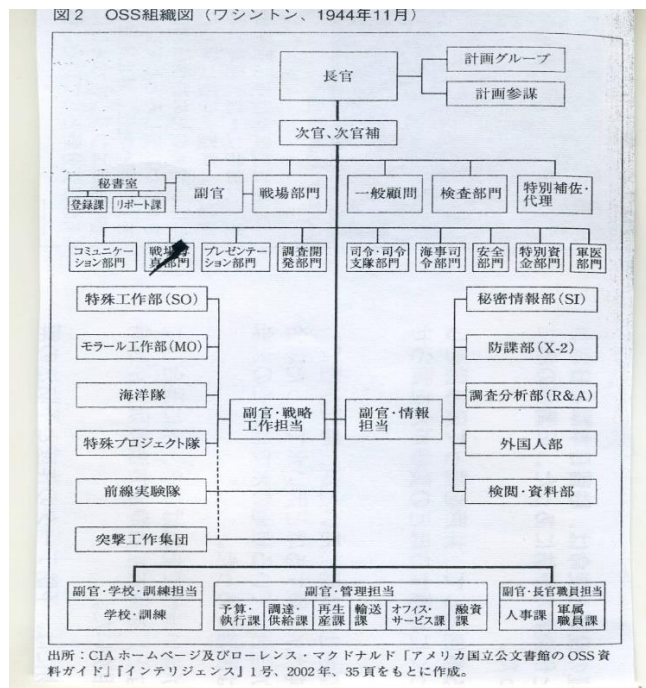
事に関する陸海軍便覧 (Army-Navy Manual of Military Government and Civil Affairs) は、「合衆国軍によって占領された地域の軍政執行および民事統制への……一般指針として資する行動基準を明示する」ものであり、占領軍の責務として「三つの指定カテゴリー」と「一つの雑則を列挙している。すなわち、「政治・行政関連事項、法と秩序の維持、軍事・民事法廷の監督、民間防衛、民需供給、公衆保健衛生、検閲、通信、輸送、港湾業務、公共事業、通貨と金融、財政、物資統制、物価および配給、農業、工業および製造業、商業および貿易、労働、財産の運営管理、情報資料、罷免職員および敵性国民の処分あるいは配置転換、教育、記録(そしてこれ以外の)雑則」である。

- I 背景一般。位置。国境。面積。歴史。政治・行政機構。
- II 国土の特徴。地形。土壌。地表植被。気候。水利。
- III 国民。民族。言語。行動傾向。人口分布。居住状況。築建衛生。土地所有。
- IV 経済。農業。工業。通商。鉱業。漁業。
- V 輸送。鉄道。道路。港湾。空港。内陸水路。
- VI 軍事地理(地域別に細分)。
- VII 現存軍事機構。陸軍・戦力組成、固定防御施設、軍事施設、補給。海軍・戦力組成、艦隊、海軍沿岸施設、海軍航空部隊、補給。空軍・戦力組成、軍用機、航空施設(特別付録の飛行場リストなど参照)、気球などの軽航空機、補給。
- VIII 特別付録。政府要人の履歴データ。局地的地理用語。河川、湖沼、運河の類。発電施設のリストと仕様。道路の類。飛行場および最重要離着陸場のリスト、主な電話電信線網のリスト。通貨および度量衡。海岸(上陸作戦適地)。

● 保全インテリジェンス=警察機能の背後にあるインテリジェンス。保安・治安・国境防衛



○ CIA ケントの成功体験＝戦時情報局 (OSS R&A) での戦時科学者動員、特に対独・対日政策及び対ソ戦略



3 20世紀冷戦期におけるケント風インテリジェンスの勝利 = 「近代化論・地域研究 vs. マルクス・レーニン主義」

- 「米ソ冷戦では、ソ連はスパイ戦争で米国を圧倒したものの、インテリジェンスでは米国に負けて崩壊した」(春名幹男『米中冷戦と日本』PHP研究所、2013)
- マンハッタン計画の人文社会科学版インテリジェンス＝目的・行動方針への確信・献身・知的貢献
- その成果としての「近代化論・地域研究」型研究・思考様式、国連・OECD統計、データ処理様式
- アメリカ型方法論的近代主義の戦時動員—社会システム・産業連関・近代化論でソ連に対抗・凌駕

- 戦後冷戦期に支配的になるアメリカの近代化論は、コミンテルンの世界綱領と類似したある種の発展段階論を下敷きに

した。W. W. ロストウ Walt Rostow にとって「成長」とは、資本・労働の増加率と人口増加率の関数として、一人当たり産出量を増大させることだった。それは、マルクス主義の「①原始共産制—②奴隷制—③封建制—④資本主義—⑤社会主義」という発展段階論を強く意識して、「①伝統社会—②先行条件準備期—③離陸期（テイク・オフ）—④成熟への前進期—⑤高度大衆消費社会」という 5 段階を設定した。いうまでもなくその最高段階＝高度消費社会を実現した近代化の「模範国」は 1950 年代＝黄金時代のアメリカであった。

発展段階論としての近代化論は、基底に生産力を置いて生産関係（生産様式）を説くマルクス主義と対決したかに見えるが、その適用過程では、一人あたり国民所得など経済的指標ばかりでなく、複数政党制や世論の役割、社会保障、電話やメディアの普及などの社会的・文化的指標をも用いて各国の発展段階を数量的に計測し、その社会的機能の統合の度合を見る視角が入っていた。実はこれは、アメリカが第二次世界大戦中に「敵国ファシズム」＝日独伊に勝利するために戦略情報局(Office of Strategic Service＝OSS、戦後の CIA の前身)調査分析部(Research & Analysis, RA)に全米の社会・科学・人文科学の俊英を集め、アメリカの世界戦略に沿って戦後世界秩序を形成するために行った、組織的基礎作業の副産物であった。

- 第二次世界大戦中の戦略情報局・調査分析部には、当時のハーバード大学歴史学部長ウィリアム・ランガー William Langer を中心に、全米の最高の頭脳・若手研究者が集められた。ランガーをはじめ政治史・外交史の歴史学者は特に重用され、戦後アメリカ歴史学会の会長 8 人が OSS/RA 出身であった。経済学でも、ソ連課で経済分析を担当したレオンチェフがノーベル経済学賞を受けるのをはじめ、戦後 5 人の全米経済学会会長を輩出した。歴史学・人類学・地理学・経済学・政治学・社会学から美術史・哲学にいたる学際的地域研究が OSS/RA の特徴で、当時の各学会重鎮のリーダーシップのもとに、全米から助教授・講師や博士論文を書いたばかりの若手の最優秀な研究者が集められた。

ランガーは、RA の任務を戦争における「客観的可能性の研究」と規定し、アナリストの政治的・方法的立場は問わなかった。FBI はそれを問題にし、後に中国研究者ファアバンク John Fairbank らに対するマッカーシズムの遠因になるが、ナチス・ドイツから亡命したアドルノ、ホルクハイマー、ノイマン、マルクーゼらフランクフルト学派マルキスト、演劇のプレヒトラも進んでファシズムとたたかう米国学問の組織化に協力した。それは、米国アカデミズムの「総力戦体制」であり、戦後米国のいわゆる地域研究 (Area Studies) の起源は、この OSS/RA の敵国分析を重要な出発点とする。

- ここから、戦後米国社会科学の方向を決定づける、数々のアイディアや方法論的模索が生まれた。経済学では、ロストウ W.W.Rostow、レオンチェフ W.Leontief がマルクス主義者スウィージー P.Sweezy、バラン P.Baran らと一緒に討論していた。社会学はシルズ E.Shils が中心で、パーソンズ T.Parsons が協力者だった。最重要な対独政策策定は、ドイツから亡命したフランクフルト学派マルクス主義者ノイマン F.Neumann、マルクーゼ H.Marcuse、キルヒハイマー O.Kirchheimer が中心で、亡命知識人が大量動員された。

それは、アインシュタイン A.Einstein ら自然科学者が原爆製造に関わった「マンハッタン計画」の人文・社会科学版であり、哲学・美学・歴史学から経済学・統計学・政治学・社会学・教育学、新興の国際関係論・文化人類学・社会心理学・地理学・メディア論等の博士号を持つ研究者約 900 人(最高時アナリスト 2000 人)が、ドイツ・ソ連や中国・日本を学際的に共同研究して対敵戦略と戦後改革を構想し、匿名の膨大な各国毎の経済・政治・社会・文化の百科全書を作り、必要な語学訓練を兵士にほどこして前線に送り、前線での現地人との接触や捕虜の扱い方、占領統治のあり方をマニュアル化する素材となった。

- その根底にあったのは、フランクリン・ルーズベルト大統領が参戦を前に述べた反ファシズム戦争の大義、「4つの自由」(1941 年)であった。フランス革命の「自由・平等・友愛」とも、日本社会主義が自由民権運動から受け継いだ「民主主義・社会主義・平和主義・国際主義」とも異なる、この 20 世紀アメリカの理念は、「①言論・表現の自由、②信仰の自由、③欠乏からの自由、④恐怖からの自由」で、ナチス・ドイツの指導者崇拜・人種主義・ホロコーストに対抗すると共に、同じ連合国のソヴェト型社会主義、中央集権的計画経済、画一主義的平等主義、思想の自由を欠いた国家主義にも対抗するものであった。この「4つの自由」の理念に導かれた戦時米国の科学技術動員体制が、戦後の地域研究や国際関係論・文化人類学・社会心理学の隆盛の前提となり、かつ、プロジェクト型研究と科学技術予算配分、レフェリー制学問評価、学際研究・境界領域研究、仮説検証型シミュレーション研究等の源泉となった。

- それらはイギリス風実証主義・経験主義とアメリカ風多元主義を根底に置くため、単一理論として方法的に体系化されたわけではないが、マルクス主義に対抗する開放的準拠枠組みを持っていた。各国地域研究を総括する一般理論はパーソンズ＝シルズの社会システム論・社会統合論に洗練され、マルクス主義の全体性・経済決定論への対抗軸となった。マルクスの再生産表式に相当するのが、レオンチェフの産業連関表とサイモン・クズネッツの国民所得計算であり、各国国民所得計算と国際比較へと展開され具体化した。各国国民経済と社会統合の歴史を統括し、世界史的に整序するのがロストウの開発経済論・近代化論で、唯物史観への対抗となる。

この意味では、アメリカ近代化論も、発展段階論と類型論を含む「アメリカ型近代主義」であった。マルクス主義の階級分析は階層・社会集団分析に拡散され、「封建制」は「前工業化伝統社会」として数量化され計測された。ロバート・ダールの「ポリアーキー」のように、民主主義の発展程度も地域研究を通じて容易に図式化され、地政学的に序列化された。それは、新しい概念の創出であり、普及だった。

- 重要なのは、マルクス主義では資本主義化の程度で類型区分されたものが、近代化論では文化領域が重視され、むしろそれを心理戦・情報戦で利用する研究戦略が採られたことである。マルクス主義では「民衆の阿片」「非合理主義」と一蹴される宗教や土着信仰、儀礼や習俗、伝統文化・言語分布・メディアをも文献とフィールドワークで丹念に拾い、むしろそれを「国民性」として、社会統合に活用可能な資源に組み替えていった。もともとナチスの宣伝戦略や指導者原理、生存圏思想や人種主義を、人類学・地理学・心理学・美学などを動員して解明する過程で引き出されたものであったが、日本については、天皇制の民衆信仰＝象徴としての利用価値が早くから認められ、ルース・ベネディクト『菊と刀』に結実した。陸軍に動員されたエドウィン・ライシャワーが、日本の近代化成功の秘密を江戸時代の寺子屋教育の普及に見出し、同時に伝統文化や天皇信仰を尊重できたのも、戦時米国の「非合理主義の合理的利用」の延長上にあった。(以上、加藤『象徴天皇制の起源——アメリカの心理戦「日本計画」』平凡社、2005年のほか、Barry M. Katz, *Foreign Intelligence*, Harvard UP, 1989; Robin Winks, *Cloak and Gown: Scholars in the Secret War*, Yale UP, 1987; George C. Chalou ed., *The Secret War: The Office of Strategic Services in World War II*, NARA, 1992, にもとづく2009日仏シンポ報告より)。
- これを単純化し、図式的に示すと、国民国家単位(ケインズ主義的福祉国家＋開発独裁)での、
 - ① 近代化・産業化・都市化・民主化の可能性 vs. 資本主義崩壊・社会主義・共産主義の必然性 (W.W.ロストウ、S.N.アイゼンシュタット、R.ダーレンドルフ、R.ダール)
 - ② 産業連関・国民所得計算、統計・消費社会化 vs. 再生産表式、搾取・恐慌・独占・帝国主義 (ワシリー・レオンチェフ、サイモン・クズネツ、国連・OECD 統計)
 - ③ 開放系社会システム、AGIL図式 vs. 一元的還元的経済的社会構成体、土台・上部構造論 (T.パーソンズ、E.シルズ、N. ルーマン)

4 冷戦期インテリジェンスと知識人の緊張——米ソ日協力者の事例と類型

- 職業別協力者の類型
 - ① 社会人文科学者・研究者＝基礎知識・専門研究、科学的分析・総合
 - ② ジャーナリスト・特派員＝具体的現実的情報、現地情報
 - ③ 官僚・軍人・企業人・技術者＝最高機密情報を含む個別的・断片的情報
 - ④ 自然科学者、芸術家＝専門的知識・技術提供、特殊技芸・宣伝表現方法から概して政治的無自覚
- 協力動機による類型
 - ① 思想的・政治的信念、使命感——自然科学者との違い
OSS F・ノイマン、H・マルクーゼ、シルズ GRU ゴルゲ、尾崎秀実、陳翰笙
 - ② 知的好奇心、専門的知識の活用、研究環境、社会実験
OSS・G2 パーソンズ、崎村茂樹、荒木光太郎 KGB 石山正三？
 - ③ 転向・偽装転向、自己批判と転身証明
CIA 佐野学、鹿島宗二郎(吉田東祐)、Ch・ジョンソン KGB 志位正二
 - ④ 経済的利益、権力欲・名誉欲、個人的弱点(抑留解除、ハニートラップなど)
G2/CIA 川合貞吉、亀井貫一郎 KGB 瀬島龍三？

5 インテリジェンスがインテレクチュアルを凌駕する時、何が生まれるか？

＝究極の監視国家 DDR(東独)の経験から

- オーウェル『1984年』の現実世界 DDR＝7人に1人が国家保安省 STAGI 協力者の国の知識人——ユルゲン/ウルズラ・クチンスキー兄妹の事例、その国の歴史学・哲学・日本研究

● DDR(ドイツ民主共和国 1949-1990)ドイツ民主共和国は社会主義国であった。政治体制はソ連型社会主義で典型的な一党制ではなく反ファシズムを最大公約とした複数政党による議会制民主主義(人民民主主義)の形態を採っていたが、実際はドイツ社会主義統一党(SED)が寡頭政治政党として指導権を有していた。SED以外に4つの政党が存在を許されていたが、衛星政党としての性格が強かった(ヘゲモニー政党制)。多数のソビエト連邦軍が駐屯する冷戦の最前線でもあり、政治的・軍事的にはソビエト連邦の衛星国であった。また、秘密警察である「国家保安省(シュタージ)」による国民の監視が徹底され、言論の自由などはないに等しかった。シュタージは職場や家庭内に非公式協力者(IM)を配置し相互監視の網を張り巡らせた。

● 「徹底した監視態勢で、東ドイツ国民を震え上がらせるばかりでなく、西ドイツにもスパイを送り込み、東西両ドイツ国民から恐れられた。全盛期には対人口比で同じドイツ帝国(ナチス政権下)のゲシュタポ、ソ連のKGBを凌ぐ徹底的な監視網を敷いた。」「解説された文書は、1969年から1987年までの記録であり、16万件を超える。文書の総数は、9億件にも上るとされる。」

● 「シュタージはその40年の歴史において、国家による反体制派弾圧のための世界で最も効率的な機関のひとつで、冷戦時には27万人以上の要員を擁し、東ドイツ国民は東欧圏のなかでも最も過酷な監視下に置かれた。1990年に東西ドイツが統一され、翌91年には一般市民でもシュタージの機密文書を閲覧できるようになった。アーカイブ開設以降、これまでの閲覧申請者は延べ160万人以上に上っている。閲覧によって初めて、友人や同僚、家族がシュタージの「陰の協力者」であったことを知った人は多い。また、これまでにシュタージのスパイであったことを自ら公表した人は数千人に達している。」「2007年の閲覧申請者は10万人超、08年はやや減の8万7000人だったが、解体から20年を迎える2009年に入ってから再び、ひと月あたり約1万人と急増している。」

- 日本人の2009申請・ファイルなし、2012申請中事例 <http://falanhe.blogspot.jp/2009/01/blog-post.html>
<http://hiraoktagesbuch.blogspot.jp/2012/07/20123iii-2.html>
ドイツ人の友人のファイルに自分の名前・経歴があった日本人の事例
http://deutschmachtspass.cocolog-nifty.com/blog/2006/05/ddr_eb86.html

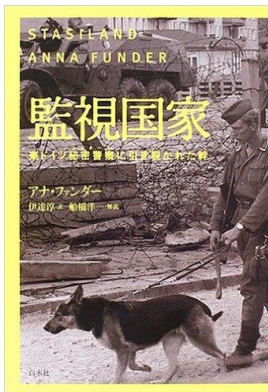


「善き人のためのソナタ」 Das Leben der Anderen 2006年、2007年最優秀アカデミー外国語映画賞
「東独DDRには、人類史の遺産が総結集されている。なぜならここには、社会主義・共産主義という現在・未来ばかりでなく、原始共同体(配給制度)も奴隷制(強制労働)も封建制(家父長制・女性差別)も資本主義(売春・ドルショップ)もそろっている」(ヴィッツェ＝アネクトート)
「外は快晴なのにウルブリヒトが室内で傘をさしている。なぜ? モスクワは雨だから」

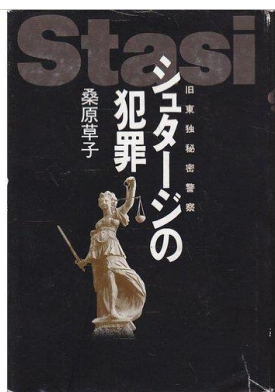
「ベルリンの壁」崩壊の時期まで流布していたヴィッツェの一つは、次のようなものであった（『朝日ジャーナル』、九八九年一月二五日、六五頁）。おそらく、大学の必修科目である「マルクス・レーニン主義」科学的共產主義の試験問題をもじり、学生が知識人がつくったものであろう。

「ドイツ民主共和国は、人類史の各発展段階から、なにを受け継いだか？」

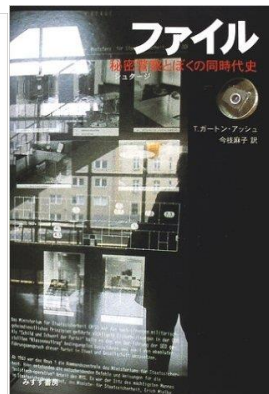
原始社会から——文化
古代社会から——奴隷制
封建社会から——身分制
資本主義から——搾取
社会主義から——名称



(白水社 2005)



(中央公論社 1993)



(みすず書房 2002)

- 加藤：1972-73 出版編集者としての会社派遣 DDR 留学、当時の親友の行方（『東欧革命と社会主義』あとがき、花伝社、1990）→帰国後在日 DDR 大使館の接触→自分自身の STAGI 記録の発掘のため申請開始

6 おわりに—— シャーマン・ケント風インテリジェンスの限界、21 世紀型インテリジェンスのインテレクチュアルな研究の必要性と可能性

●情報の生産・流通・消費の変貌＝過渡期としての冷戦崩壊、新自由主義・グローバリズム

- ① 生産 「仮想敵」ソ連の喪失・分散化、素材＝集積データの極大化、IT 利用＝施設・予算の限界
人材＝旧ソ連・東欧からの転身、民間調査機関・グローバルシンクタンク、hackers
- ② 流通 空間・時間距離の瞬間化、インターネット＝個人メディアの普及、個人情報市場出現
- ③ 消費 政府に留まらない消費者＝企業・NGO・市民、「外国」概念の変容、経済諜報拡大

●「情報戦環境の構造的変化——近代は終わったか、再編か、新しい中世か？」

- ① 国民国家単位の近代化論・地域研究の衰退と継続＝多国籍企業、移民・難民・外国人労働者、金融・カジノ資本主義、民族・宗教・言語・コミュニケーション、権力とテロリスト、中国
- ② 核兵器・地球環境＝国際機関・国際法の役割、安全保障の人間化・個人化、グローバル
- ③ 実効性ある世界戦略 maker の不確実＝米国の衰退、中印の勃興、EU、WE F vs. WS F
- ④ 地球国家の不在と個人情報監視の技術的成熟のもとでの格差・差別、人権・主権・情報公開
- ⑤ オーウェル 1984/DDR シュタージ/スノーデン NSA-PRISM 型社会と AI インテリジェンス？

● アクチュアルな問題——自然・社会・人文科学の境界流動化のもとでのインテリジェンスとは？

- ① 1949年と2017年の違い＝メディア情報の加速度的増大、インターネットとビッグ・データ
- ② 知識人の国家・政府との距離・緊張関係、学術会議、アサンジ、スノーデン vs. トランプ、バノン
- ③ 歴史的には冷戦型情報戦から Post-Truth, Fake News, Twitter Populism へ（Post 近代？）

（参考文献：直接扱わなかった主なもの）

I・ウォーラーステイン『知の不確実性ー「史的社会科学」への誘い』（藤原書店、2015）

中西輝政・小谷賢編『インテリジェンスの20世紀』（千倉書房、2007）

北岡元『インテリジェンスの歴史』（慶應義塾大学出版会、2006）

小谷賢『インテリジェンスの世界史』（岩波現代全書、2015）

佐々木太郎『革命のインテリジェンス: ソ連の対外政治工作としての「影響力」工作』（勁草書房、2016）

大森義夫『日本のインテリジェンス機関』（文春新書、2005）

塚本勝一『自衛隊の情報戦ー陸幕第二部長の回想』（草思社、2008）

加藤哲郎『20世紀を超えて』（花伝社、2001）『国境を越えるユートピア』（平凡社ライブラリー、2002）

加藤『象徴天皇制の起源』（平凡社新書、2005）

加藤『情報戦の時代』（花伝社、2007）『情報戦と現代史』（花伝社、2007）

加藤『ワイマール期ベルリンの日本人』（岩波書店、2008）『日本の社会主義』（岩波現代全書、2013）

加藤『ゾルゲ事件』（平凡社新書、2014）『飽食した悪魔の戦後』（花伝社、2017 予定）

（以下は、「ネチズンカレッジ」DB内）<http://netizen.html.xdomain.jp/home.html>

加藤編集・解説『CIA 日本人ファイル』全12巻（現代史料出版、2014年7月）『』（現代史料出版、2016年3月）「解説」

加藤「情報戦のなかの『亡命』知識人ー国崎定洞から崎村茂樹まで」（20世紀メディア研究所『インテリジェンス』誌第9号、2007年11月）<http://netizen.html.xdomain.jp/home.html>

加藤「社会民主主義の国際連帯と生命力」（田中浩編『リベラル・デモクラシーとソーシャル・デモクラシー』未来社、2013年1月、所収）<http://netizen.html.xdomain.jp/miraisakimurabook.pdf>

加藤「『国際歴史探偵』の20年ー世界の歴史資料館から」（法政大学『大原社会問題研究所雑誌』670号、2014年8月号 <http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/oz/670/index.html>

以上

